スペイン語の否定語 no の統語的制約と否定語相互の差異について

田林　洋一

1. 序

本稿の目的はスペイン語の否定語（Palabras Negativas）no の特徴、及び no とそれ以外の否定語の相違を記述することである。スペイン語の否定語の研究は膨大な数に上るが、本稿では今までの先行研究では（記述されてはいるものの）体系的に対比されていない否定語の統語的特徴と差異を明確にしたい[1]。

さて、本稿では①内在的に否定・反駁・非現実などの意味を持つ、②閉じた類（close class）の機能語である、の 2 点から、no, nadie, nada, nunca, ninguno/a, jamás, tampoco, ni の 8 つを否定語と定義する[2]。従って、上記の「それ以外の否定語」とは副詞 no を除いた 7 つの否定語（nadie, nada, nunca, ninguno/a, jamás, tampoco, ni）を指す。

第 2 節では否定語 no とその統語的位置の制約について分析する。第 3 節では対応する肯定極性項目（Términos de Polaridad Positiva）を持つ no 以外の否定語を概観すし、機能的に no と一線を画することを見る[3]。

2. 否定語 no とその統語的制約について

スペイン語で否定や反駁を表す際に用いられる最も一般的な否定語は no であるが、

---

[1]具体的な研究は Gili Gaya（1961）、RAE（1973）、Bosque（1980）、Marcos Marín（1980）、Hernández Alonso（1982）、山田（1995）、寺崎（1997）、Sánchez López（1999）他を参照。なお、Bosque（1980）や Sánchez López（1999）等の否定語の主要な先行研究は、副詞 no をそれ以外の否定語と区別していない。山田（1995 : 215）は否定語 no に特殊な機能を認め、それ以外の否定語と区別しているが、記述が少なく不完全な面がある。

[2] 多くの先行研究では、これらの語の他に apenas を否定語に含めている（Bosque（1980 : 104）、山田（1995 : 216）他）。しかし、apenas の意味成分だけで、命題の可能性が全て排除ないしは反駁されるわけではない。Llorens（1929）の定義を参照。

（i）*Apenas* y las expresiones equivalentes pueden denotar escaso margen de posibilidad o realización incompleta en una acción o estado.

Llorens（1929 : 183 一部改）

apenas は他の否定語とは異なり、語の内在的意味特性だけで焦点となる語の語彙的意味を全て否定することはできない。第 3 節参照。

[3] 本稿では便宜的に肯定極性項目を「肯定環境に好んで現れる言語表現」、否定極性項目（Términos de Polaridad Negativa）を「否定環境に好んで現れる言語表現」と定義する。

no には他の否定語にはない特徴がいくつかある。本節ではその特徴を記述する[4]。

2.1 no の位置と焦点について

話者は、否定語 no の位置をある程度自由に決定できる（no 以外の否定語は「否定ないしは反駁」以外の意味も持つため、置かれる位置の制約が no よりも厳しい。第 3 節参照)。従って、焦点が曖昧になることがある。以下を参照[5]。

(1) a. La gramática se aprende bien en la primera edad.
b. La gramática no se aprende bien en la primera edad.
Sánchez López (1999 : 2563)

(1b) は (1a) を否定した文であり、「文法は青少年期によく学習されるわけではない」と字義通りに解釈できるが、no は他の否定語と違い作用域及び焦点が明確でなく、(1b) の否定の焦点は以下の 5 つの可能性が考えられる[6]。(2d) は焦点が外項（主語）のため、(2e) は文否定のためにやや有標的である[7]。

---

[4] 否定語 no は最も一般的だからといって最もデフォルトな機能ないしは共通性があるということではない。むしろ、否定語 no は他の否定語に比べて特殊な振る舞いを見せる。

[5] 例文は特に言及しない限り、筆者が作成し、2 名のスペイン語ネイティブスピーカーからチェックを受けたものである。

[6] Bello (1980 : 330) は、(ｉ) が可能性を否定しているのに対し、(ii) は学習されないこと (no aprenderse) がありうることだとして肯定されていると主張するが、否定語 no が後ろに置かれた構成素を否定するという点は本稿の趣旨と一致する。
(ｉ) La gramática no puede aprenderse bien en la primera edad.
(ii) La gramática puede en la primera edad no aprenderse bien.
Bello (1980 : 330)

[7] 本稿では文否定 (Negación Oracional) を「先行する命題を、前提されたものであれ発話（断定）されたものであれ、反駁し、その命題が現実に合わないことを表明する否定」と定義する。前提を否定すると解釈されたものは、必ず文否定（メタ言語否定）になる。従って、発話そのものを否定することが出来るので、否定された発話内に肯定極性項目が現れることもある。
(ｉ) Juan no es el más listo de la clase.
(ii) a. No es el caso de que Juan sea el más listo de la clase.
b. Respecto de Juan, no es cierto que sea el más listo de la clase.
(ｉ) は、(ii a) の解釈「フアンがクラスで一番利口という訳ではない」か、(ii b) の解釈「フアンについて言えば、フアンが一番クラスで利口ではない」の二つが可能である。しかし、①主語は指示的かつ定形であり、談話の中では否定の対象とは解釈

(2) a. La gramática no se aprende *bien* en la primera edad, sino se aprende mal.

b. La gramática no se aprende bien *en la primera edad*, sino se aprende bien en la tercera edad.

c. La gramática no *se aprende* bien en la primera edad, sino se entiende bien.

d. *La gramática* no se aprende bien en la primera edad, sino el léxico se aprende bien.

e. No es que *la gramática se aprenda bien en la primera edad.*

Bello（1980：330 一部改）

スペイン語で、このように焦点の曖昧性（構成素否定か文否定かの解釈の揺れを含む）が発生する否定語は no しかない[8]。焦点の曖昧性を回避する方法は、否定語 no を反駁の対象となる構成素の直前に置くことである。

(3) a. La gramática no se aprende bien en la primera edad.（=（1b））

b. La gramática se aprende no bien en la primera edad.

c. La gramática se aprende bien no en la primera edad.

d. ?No la gramática se aprende bien en la primera edad.

(4) a. No porque él se oponga abandonaremos nuestro propósito.

Gili Gaya（1961：51）

b. No porque se aprobase aquel arbitrio, lo adoptó la junta, sino

---

されづらいこと、②文否定は特別なコンテクストが必要なこと、の二点から、通常否定は構成素否定の形を取る。

[8] 本稿では構成素否定（Negación Sintagmática / Negación de Constituyente）を、「文否定よりも小さな作用域を持ち、否定語の直後に置かれた句のみにしか影響を与えられない否定」と定義する。以下の文を参照。

（i）María comió no peras, sino manzanas.

Sánchez López（1999：2566）

（i）では、名詞句 peras のみが否定の影響を受けている。従って、peras 以外の情報（María comió）は断定されているため旧情報と解釈でき、sino manzanas という訂正が可能である。つまり peras は否定の焦点となっている。なお、語否定と構成素否定の中間も存在しうる（具体的な議論は Sánchez López, 1999：2566 参照）。基本的に構成素否定は文の構成素、特に述語を否定することが多い。

porque era el único que se presentaba.

Bello（1980：330）

否定語は通常「単独で動詞の前に置かれると命題に否定極性を与えうる語」と定義されるが、否定語 no だけは例外であり、動詞の前後にかかわらず如何なる位置にあっても否定極性を命題に与えうる[9]。但し、Sánchez López（1999：2571）が正しく指摘しているように「動詞の前ないしは後に否定語が来る」という記述は、言語の線状的特性からの記述であり、構造的ではない。

(5) a. *María no ha venido y Pepe ha ido a ningún sitio.

b. *Juan no dice que María ha comido nada.

Sánchez López（1999：2572）

従って、否定語が動詞の前に置かれるか、ないしは後ろに置かれるかという言明は、「(必要ならば何らかの操作を経た結果) 否定要素がそれ以外の要素を c 統御しているか否か」と置き換えて考えなければならない[10]。

さて、(3a) ではデフォルトの位置である動詞の直前に否定語が置かれている。この

---

[9]「否定語を動詞の前に置くことによって否定極性を与えうる」という説明には、従属節内での振る舞いや重文、連結等位接続詞 (y) といった要因のために諸々の例外がある。詳しくは Bosque（1980）、Sánchez López（1999）、田林（2008）他を参照。

また、「如何なる位置にあっても」という条件は、基本的に構成素を形作っている要素内に他の要素は入り込めないため「異なる独立した構成素の間に no が生起しさえすればどこでも」という意味である。(ｉ) は構成素の中で他の要素 (no) が生起されているので容認不可能である。

(ｉ) a. *??La gramática se aprende bien en no la primera edad.

b. *La gramática se no aprende bien en la primera edad.

c. *??La gramática se aprende bien en la no primera edad.

しかし、命題的な名詞句や動詞句内では no の生起を許すことがある。2.2 節参照。

[10] 構成素統御（c-command、以下 c 統御）は、Reinhart（1976）によって以下のように定義される。

(ｉ) α、βいずれも他方を支配せず、かつαを支配する最初の枝分かれ節点がβを支配する時、節点αはβを c 統御する。

Reinhart（1976：32）

時、解釈が曖昧になることは既に（2）で見た。しかし、（3b）と（3c）では反駁する要素の直前に否定語 no が置かれており、（3b）は（2a）の、（3c）は（2b）の解釈を持ち、曖昧性がなくなる[11]。更に（4a）が示すように、否定語 no は接続詞に導かれた従属節をも否定することができる。

（3d）はインフォーマントによって判断が分かれるが、二つの解釈の可能性が考えられる[12]。一つは主語の La gramática のみを焦点として捕らえた構成素否定の解釈で、（2d）と等価であり、もう一つは文全体を否定の焦点として捕らえたメタ言語否定の解釈で、（2e）と等価である。いずれにせよ、（3d）が有標的と解釈されるのは以下の理由による。即ち、（何らかの操作を経て）主語を否定の作用域にとらえる場合は、否定語が主要部の指定部を c 統御する必要があり、結果として主語は否定の作用域に入りづらくなるためである（メタ言語否定なども同様の操作が要求される）[13]。

また、（4b）のように否定語 no と動詞の間に文全体が挿入される現象は、既に Gili Gaya（1961）、Hernández Alonso（1982）他で指摘されているが、（2e）のように有標的な解釈になることが多い。否定語が文全体の前に出現し、その命題を反駁しうる現象は、no にのみ見られる特性である。

no 以外の否定語は生起する位置に制約があり、動詞の前に置かれることによってのみ否定環境を作る機能を持ちうる。従って、（no 以外の）否定語が単独で動詞の後に置かれただけでは（6a）が示すように基本的に容認されない。但し、もう一つの否定語や否定要素（田林（2008）参照）が既に動詞の前に置かれている場合はその限りで

---

11 日本語では否定語の位置ではなく、代わりに取り立て助詞の位置が焦点を決定しているように思われる。

（ｉ）a. 彼も　船で　南極へ　行った。
　　b. 彼は　船でも　南極へ　行った。
　　c. 彼は　船で　南極へも　行った。
　　d. 彼は　船で　南極へ　行きもした。

沼田（2000：48）

しかし、沼田と徐（1995）が正しく指摘しているように、（ｉd）は（ii）の解釈（即ち、焦点が方向格ではなく動詞の解釈）の方が自然であるため、取り立ての焦点が常に曖昧性を回避できるわけではない。

（ii）彼は　船で　南極へ　行きもした（そして北極へも行った）。

焦点の曖昧性は卓立を適切に与えることによってある程度回避できるが、その分析は今後の課題とする。

12 （3d）自体が非常に有標的な表現なので、それ以外の解釈が存在する可能性もある。

13 指定部（Specifier）とは、Chomsky（1981）の X バー理論における X'と姉妹関係（sister）にある要素を指す。詳しくは上記の文献を参照のこと。

はない。

(6) a. *La gramática se aprende nada / nadie / ninguno / nunca / jamás / tampoco / ni bien en la primera edad.

b. La gramática no se aprende nunca / tampoco / ni bien en la primera edad.

(6a) は非文だが、他の否定語（この場合は no）が動詞の前に置かれている（6b）は容認可能である[14]。

さて、否定語 no がそれ以外の否定語に比べて生起する位置に制約が少ないことは既に述べたが、基本的にある独立した構成素を形作っている要素内に他の要素は入り込めず、否定語も例外ではない（(8) 参照）。但し、no に限ってはいくつか例外があり、同一の動詞句内及び名詞句内であっても容認されることがある（(9) 参照）。

(8) a. *Tu hermana puede nadie / nada / ninguno / nunca / jamás /tampoco volver.

(9) a. Tu hermana no puede volver.

b. Tu hermana puede no volver.

c. No deseaba entrar.

d. Deseaba no entrar.

Gili Gaya（1961 : 51）

(9) は動詞句内での否定語の位置によって解釈が変わるが、全て容認可能な文である。意味的には（9a）のように動詞 puede を否定すると迂言形式全体が否定されるため「あなたの妹は戻ることが出来ない」と解釈される。一方、(9b) のように不定詞のみを否定すると動詞 puede は否定の作用域外になり、(9a) と異なり「あなたの妹は戻らないことがありうる」と解釈される。(9c) 及び (9d) も同様である[15]。

---

[14] 動詞の前に置かれる否定語は no だけでなく、他の否定語も許容する。

（i）Ni una sola obra sobre el tema ha podido encontrar nadie.

Sánchez López（1999 : 2564）

（i）には否定語 no が存在しないが、動詞の前に置かれる否定語 ni の存在により正しく nadie と否定の呼応をし、認可される。2.2 節参照。

[15] 山田（1995 : 550）は、以下の例を挙げて動詞句内に出現した否定語 no の機能を説

さて、(8) が示すとおり、基本的に（no を除いた）否定語を含めたある要素は、別の構成素に入り込んで生起することができない。しかし、強調の意を持つ ni は否定環境であれば動詞句内に生起しうる（(10a) 参照)。否定環境でない（10b）の場合は、否定語 ni が否定の呼応（2.2 参照）をしていないため非文となる。また、(10c) 及び（10d）が示すように、対応する肯定極性項目 y は極性環境に関わらず動詞句内に出現できない。no 以外の否定語は動詞句内に出現できないことから（(9) 参照)、この点で否定語 ni は他の否定語とはやや異なる機能を持つといえる。

(10) a. No quiero ni pensar.
b. *Quiero ni pensar.
c. *No quiero y pensar.
d. *Quiero y pensar.

否定語 ni とは逆に、動詞句内に肯定極性項目の出現が認可され、対応する否定極性項目の出現が認可されないケースがある。

明している。ここで注目すべきは、①否定語が動詞の直前に出現したからといって必ずしも動詞のみが否定の焦点になるとは限らないこと、②動詞句内に出現することができるのは否定語 no だけである、の二点である。従って、スペイン語で構成素否定として振舞うことが出来る否定語は、原則として否定語 no だけ（時に否定語 ni も）である。

(i) a. Le pedí que repitiera la pregunta, pero no volvió a contestar.
b. Le repetí la pregunta, pero volvió a no contestar.
(ii) a. No debes ir a verla.
b. Debes no ir a verla.

山田（1995：550 一部改）

(i a) は「二度と返答しなかった」と述べているため、「一度は返答している」という語用論的含意が生じる。ここで「語用論的含意」としたのは、「二度と返答しなかったのではなく、実際は一度も返答していないのだ」というメタ言語否定ないしは前提の取り消しの否定の解釈が可能だからである。しかし、デフォルトの解釈としては否定の作用域は volvió までであり、contestar にまでは及ばない。一方、(i b) は「答えないことを繰り返した」のであるから、「一度も返答していない」という論理的含意が成立する（語用論的含意とは異なり、前提の取り消しが出来ない論理的帰結である点に注意)。但し (ii a) のように、実際は下位の不定名詞句の否定（ir という行為をしないという義務がある）という (ii b) の解釈を持ちながら、否定語 no が定形動詞の前に出現することもある。

(11) a. Tu hermana puede, también, volver.
b. *Tu hermana puede tampoco volver.

(11a) が容認されるのは、副詞 también が持つ統語的特性に因るところが大きい。副詞 también はほとんど如何なる位置でも挿入句として扱われて、その出現を容認されうるからである。

さて、否定語の位置をある程度自由に決定できるということは、その反駁の対象となる焦点が確定しづらいということも同時に意味する。特に否定語 no の焦点は必ずしも一つではなく、作用域内にある全ての項に影響を及ぼしうる。no 以外の否定語は基本的に焦点が明確であり、複数の項に影響を及ぼすことはない。

(12) La gramática no se aprende bien en la primera edad, sino el léxico se aprende bien en la tercera edad.

(12) は否定の焦点が複数存在する場合であり、「文法が青少年期によく学習されるのではなく、語彙が老年期によく学習されるのだ」という解釈も可能である。しかし、ある命題における項のほとんど（ないしは全て）を否定の焦点と解釈すると、そもそも取り消した後の命題を最初に発話すれば言語の経済性の原理を保ちうるという点で、最初の発話が何故されたのかという疑問が浮上する[16]。また、Grice (1975) のいう会話の公準（特に情報量の公準）にも違反することになるので、あまり多用はされない。

一方、no 以外の否定語は基本的に否定の焦点が一つとなる。これはそれぞれの否定語が意義素として「否定ないしは反駁」以上の意味を内在的に持つためである。

2.2 no の否定の呼応と二重否定について

否定語 no の更なる特徴として、否定の呼応（Concordancia Negativa）として項に出現することが出来ないということが挙げられる。以下の文を参照。

---

[16] この時も動詞は否定の焦点となりうる。
(i) La gramática no se aprende bien en la primera edad, sino el léxico se entiende bien en la tercera edad.
しかし、動詞までも含めた全ての項及び付加詞が否定の焦点となっている場合、①結果としてメタ言語否定と解釈されること、②否定文が発話される意義がほとんどなくなること（Grice (1975) の会話の公準に違反）などから、現実の発話としては存在しにくい。

(13) a. No vino nadie.
b. *No vino no nadie.
c. *No vino no alguien.

no がそれ以外の否定語と同じ機能を有するのであれば、(13a) のように否定の呼応として出現した nadie と同様に、否定語 no も否定の呼応として働くはずである。しかし、(13b) は非文であり、かつ (13c) に見られるように、肯定極性項目の前に no を置いても否定の呼応としては機能しない。更に、肯定極性項目の前に置くことで構成素否定として働く no は、否定の呼応でなくとも (即ち no が単体で出現し、かつ挿入されている箇所が範疇の内部に入り込まない時でも) 容認度は低い[17]。

(14) a. ??No alguien viene.
b. ??Viene no alguien.

(14) で注目すべきことは、否定語 no を肯定極性項目の前に置いて構成素を否定するだけでは (13a) とは意味が異なりうるということである。(14a) には二つの解釈があり、一つは no を構成素否定とする無標的な解釈である[18]。もう一つはメタ言語否定の有標的な解釈で「誰かが来るというわけではない」という意味である。しかし、(14b) は後者のメタ言語的な解釈を許さない (メタ言語的な解釈が許されるのは、否定要素が文全体を c 統御している場合だけである)。いずれにせよ、(13a) が「誰も来なかった」と断言していてそれ以外の解釈ないしは含意が入る余地がないのに対し、(14a)

---

[17] ここでは否定語 no の出現位置及び否定環境について触れたもので、no + alguien の組み合わせが alguien の構成素否定として働いて nadie と完全に等価になるというわけではない。nadie を no+ alguien とする考え方は、以下の文から却下できる。
(i) a. *Juan llegó hasta las 4.
b. Nadie llegó hasta las 4.
Bosque (1980 : 38)
(i a) が示すように、継続的でない hasta (hasta no durativo) は否定環境にのみ生起しうる。もし nadie が no + alguien と等価であるとすると、(i b) の否定の作用域は (表層には現れ得ない) alguien のみになり、hasta は否定の作用域外とする解釈になり、非文にならなければおかしい。更なる反論は Jackendoff (1972) が詳しい。
[18] 生じる含意は更に二種類あり、一つは「誰かが来ないのならば、たくさん来たのだろう」という上方含意、もう一つは「誰かが来ないわけではなく、そもそも誰も来なかった」という下方含意である。

は曖昧な解釈を持つということである。

否定語 no が従属節や関係節に出現した場合、他の否定語と違って（従属節内や関係節内で）主節にある否定語と否定の呼応を見せないため、基本的に二重否定の解釈を取る。no 以外の否定語は、同一節内になくとも否定の呼応を見せることがある。

(15) No es que no quiera.

(16) a. No conozco un periodista que no haya estado jamás en el Tíbet.

b. No conozco un / algún / ningún periodista que haya estado jamás en el Tíbet.

Sánchez López（1999：2589）

(15) は二重否定であり、論理式¬¬P≡P により肯定解釈がなされる（但し、二重否定における含意及び有標性を考慮に入れると、肯定文と意味的に完全に等価というわけではない）。(16a) も同様に二重否定であり、文全体としては肯定極性を持つ。つまり、関係節内の否定語 no は否定の呼応として働いているわけではなく、関係節内は否定環境である。しかし、関係節内の否定語 no を除いた (16b) は、主節の否定語 no に関係節内の否定語 jamás が呼応しているだけで、関係節内は否定環境を持たない。即ち、関係節内は肯定環境、文全体としては否定文となる。

以上のように、否定語が動詞の前に置かれ、かつ二重否定として機能する例は否定語 no の他に、前置詞 sin が持つ否定要素（cf. no sin miedo = con miedo）や語否定が挙げられる[19]。否定語 no（及び前置詞 sin や語否定）が持つ否定要素は、他の否定語とは異なり、否定の呼応として働かないため否定極性項目にはならない（Hernández Alonso（1982）他参照）。

(17) Lo hizo no sin esfuerzo.

Hernández Alonso（1982：53）

(18) a. No es imposible que venga nadie.

b. Es imposible que venga nadie.

Sánchez López（1999：2566）

---

[19] 本稿では語否定（Negación de Palabra）又は形態的否定（Negación Morfológica）を、in-, des-, a-などがつくことで、語彙的に否定の意味を持つ語と定義する。こうした形態的否定は語彙単位のみでしか反映されず、統語構造にまで否定極性は及ばない。

(17) は否定語 no と否定環境を作りうる要素 sin が共起し、二重否定の解釈（真理値は肯定）を持つ。従って、前置詞 sin は内在的に否定の意味を持つが、否定の呼応として働かない。(18a) は語否定 imposible が no の後に出現しているが、語否定は否定の呼応として働かず「不可能ではない」(二重否定となり「可能だ」と真理値は等価）と解釈される。しかし、語否定は (18b) が示すように、否定極性誘因子 (Inductor de Polaridad Negativa) [20]として機能し、従属節内に否定の呼応として否定語 nadie の生起を許す[21]。従って、(18b) は「誰かが来るのは不可能だ」という意味になる。

現代スペイン語では、同一節内で二重否定を許す例も（メタ言語否定と同様に）存在する。以下の文を参照。

(19) La no determinación del SN no favorece siempre la ausencia de artículo.

Bosque (1980 : 134)

(19) は同一節内に否定語 no が複数出現し、しかも両方とも動詞よりも左方に置かれているにもかかわらず適格である。これは次のように分析される。即ち、(19) の主語である La no determinación del SN に出現する否定語 no は、determinación を正しく作用域内に収め、構成素否定として働いている。そのため、主語内に出現した否定語 no の影響は、名詞句の中で完結し、動詞にまで影響を及ぼしていない。つまり、determinación del SN は小文に近い機能を持ち、命題的な役割を果たす。一方、二番目に出現している否定語 no は適格に動詞の直前に置かれ、動詞 favorecer を作用域内に収めている。従って、否定語 no は各々独立して機能し、(19) の最初に出現している no は determinación を構成素否定、二番目に出現している no は siempre を構成素否定していると解釈される。

命題的な名詞句内に否定語 no が出現する更なる例として、以下の文を参照。

(20) La no comparecencia de los diputados a la sesión provocó la ira del

---

[20] 否定極性誘因子とは否定極性項目の出現を認可する環境を作りうる要素であり、antes de、si 節、en lugar de などがある。否定語は必ず否定極性誘因子であるが、否定極性誘因子は否定語とは限らない。

[21] その他の否定語との組み合わせで、否定の呼応として働かず二重否定となりうるものに、ni menos や ni tampoco 等の慣用句が挙げられる。Hernández Alonso (1982 : 53) 参照。

presidente.

Sánchez López（1999：2566）

Sánchez López は（20）に出現する否定語が構成素否定と語否定の中間の働きをすると説明する。しかし、La no comparecencia de ningún diputado のように否定の呼応をする否定極性項目 ningún が名詞節内に出現しうることを考えると、否定語 no は小文における命題の否定として機能していると考えられる。つまり（20）の否定語 no の焦点は comparecencia であり、動詞 provocar にまで作用していない。従って、以下のように動詞句を否定することも可能となり、結果として二重否定の解釈を持つ。

(21) La no comparecencia de los diputados a la sesión no provocó la ira del presidente.

（21）は（19）と同様に同一節内に否定語 no が複数出現しているが、適格である。（21）の名詞句内に出現する否定語 no は、命題的な名詞句 comparecencia を焦点とし、それ以外の要素には否定の影響は及ばなくとも認可される。一方、二番目に出現する否定語 no は正しく動詞を否定の作用域内に収めているため適格である。

2.3　否定の省略について

否定語は時として旧情報を省略しても反駁の意を伝えられることがある。

(22) a. ¿Has fumado?
b. No (he fumado).

（22b）は（22a）の返答であるが、旧情報である he fumado を省略しても問題はない。しかし、命題的な名詞はそれ単独で否定の焦点となるため、否定の省略を許さないことがある。

(23) a. El gobierno discutió sobre la aprobación o no aprobación de la propuesta.
b. El gobierno discutió sobre la aprobación o no de la propuesta.
c. El gobierno discutió sobre la aprobación o no *(aprobación de la propuesta).

Sánchez López（1999：2566-2567 一部改）

d. El gobierno no discutió sobre la aprobación o no de la propuesta.

(23a) の否定語 no は aprobación のみを焦点としているため、名詞を省略した (23b) では命題的な名詞 aprobación の意味的な目的語である de la propuesta を義務的に要求する。これを「命題的な名詞（句）の意味的な目的語」と呼ぶのは、aprobar la propuesta のように名詞句をそれに対応する動詞句にした場合、la propuesta は目的語として機能するからである。従って、(23a) の名詞句 la aprobación de la propuesta は、動詞句 aprobar la propuesta が名詞化し、命題的な意味を持つと考えられる。一方、意味的な目的語 de la propuesta をも省略した (23c) は非文となる。更に、(23d) は否定語 no が動詞の前に置かれ、かつ目的語に no が出現しているが、二番目の否定語 no は否定の呼応として働くのではなく単独で命題 (aprobación) に否定極性を与える。従って、それぞれの否定語 no は独立して構成素否定の解釈を持つ。

2.4 章結

以上、否定語 no の振舞いを概説した。先行研究での否定語 no の機能的分類については山田（1995：215）が参考になる。山田は否定語 no を「返答の副詞」と「否定の no」に分類し、後者を更に 4 つのカテゴリー、即ち、文・節・句の否定、名詞の否定、形容詞・過去分詞の否定、副詞の否定に下位分類している（本稿では記述事実については概ね山田を支持する）。しかし、厳密にはこれらは否定語 no だけの特性ではなく、no 以外の否定語も同様の機能を有することがある。例えば、動詞の前に置かれなくとも構成素否定となりうる語は、厳密に言えば否定語 no だけではない。

(24) a. María comió no peras ni manzanas.

b. ??María comió no peras y manzanas.

（24b）の容認度が低いのは、否定環境に肯定極性項目である順接の接続詞（Conjunción Copulativa）y が出現しているためである。しかし、(24a) の ni は単に順接の接続詞だけでなく、同時に強調の意を担う。従って、(24a) の ni は名詞 manzana を構成素否定し、「マリアは梨も、そしてリンゴすらも食べなかった」という、ni が持つ強調の意が manzana にのみかかるという解釈も可能である。

更に、山田が否定語 no の特徴としている返答の副詞は no 以外にも存在する。

(25) a. ¿Has matado el tiempo?
b. Nunca.

否定文による返答は省略を前提としていることが多く「返答の際には副詞 no が使用される」と記述するだけでは不完全である。(25a) の返答である (25b) は、厳密に言えば以下の文の nunca に後続する要素を省略したものである[22]。

(26) Nunca he matado el tiempo.

従って、「動詞の前に置かれた no 以外の否定語」も、反駁の意味で返答の副詞ということができる。

要約するならば、否定語 no はそれ以外の否定語とは異なり、①否定の呼応として働くことはない、②否定環境に更に否定語 no が出現したら、原則として二重否定になる、③動詞の前後にかかわらず、いかなる位置に生起しても否定極性を命題に与えうる、となる。

次節以降では、no 以外の否定語について述べる。

3. no 以外の否定語について

本節では、第 2 節で検討した no と比較しつつ、それ以外の否定語の特徴を簡略にまとめる。no 以外の否定語は、nada、nadie、ninguno、nunca、jamás、tampoco、ni が挙げられる。これらは山田 (1995 : 216) が指摘しているように、それぞれ対応する肯定極性項目を持つ。

(27) nada - algo、nadie - alguien、ninguno - alguno、nunca/jamás - siempre/alguna vez、tampoco - también、ni - y

山田 (1995 : 216 一部改)

---

22 (i) の位置にある nunca は、単独で文に生起できず、必ず否定語 no を伴わなければならない。従って、(25b) は (ii) が非文であるのと同様の理由により (i) の文の省略形ではない。

(i) No he matado nunca el tiempo.
(ii) *He matado nunca el tiempo.

これらの否定語は、概念構造内ではそれぞれ対応する肯定極性項目として存在し、表層で否定環境の影響を受け否定極性項目として具現化する[23]。これらの否定語に共通する特徴は、以下の通りである。

(28) 同一節内における no 以外の否定語の特徴

a. 動詞の後に置かれた場合、動詞の前にもう一つの否定語（ないしは否定極性誘因子）を要求すること。

b. 動詞の前に置くことでのみ単独で否定表現を作れること。

c. 動詞の前に置かれる否定語は一つのみで、その他の否定語は動詞の後に来なければならないこと[24]。

これらの特徴は、no には見られないものである。以下、(28) の妥当性を検証する。

(29) a. No tiene a nadie que lo sepa apreciar.

b. Nadie sabía cuál era la solución.

(30) a. No temo nada, no espero nada y no creo en nada.

b. Nada hay difícil para la voluntad.

(31) a. No había ido a bailar nunca.

---

23 概念構造（Estructuras Conceptuales）とは、項構造や意味構造としばしば混同されるが、本稿では暫定的に「言語表現に反映されうる概念的事象」と定義する。

24 例外的に nunca y nadie、nunca jamás、ni tampoco という表現がある。これは *nunca y nada、*nunca nada などのように他の否定語の組合せを許さないことから、主に強調の意味を伴う語彙化された表現とみる方が正しい。以下の文を参照。

（i）a. Nunca nadie había dicho eso.

Sánchez López（1999：2568）

b. Ni tampoco se hizo caso alguno de los que intercedieron por él.

Bello（1980：331）

更に、専ら古風さを表現するために、主にドミニカやパラグアイのスペイン語では「否定語＋no＋動詞」の並びが観察される。これはパラグアイの原住民語であるグアラニー語の影響が大きい。以下はグアラニー語の語順とその字義通りのスペイン語訳である。

（ii）a. Mba' eve ndarekoi.

lit. nada no-tengo.

b. Arakaeve ndohoi che rógape.

lit. nunca no-va a mi casa.

Sánchez López（1999：2569）

b. Nunca pensé vivir una vida así en Suecia.

(32) a. No lo puedo olvidar jamás.

b. Jamás le había sucedido cosa semejante.

(33) a. Allí no había ningún otro cliente.

b. Ningunos amigos están en mi oficina.

(34) a. No tengo ni la menor idea.

b. Ni que decir tiene que soy absolutamente feliz.

(35) a. No he hecho tampoco.

b. No digo que sí, pero tampoco he dicho todavía que no.

Sánchez López（1999）及び山田（1995）より一部抜粋

(29a) ～ (35a) は、それぞれ否定語が動詞の後にある時に、動詞の前に置かれている否定語が一つしかないため (28c) の要件を満たしている。(29b) ～ (35b) は、否定語が動詞の前に置かれているため (28b) の要件を満たしている。よって、両者とも否定極性を持つ。両者の違いは、前者よりも後者のほうが否定の意味が強調されているということである。これらの否定語は否定語 no とは異なり、否定の焦点が曖昧にならない。何故なら、各否定語はそれに対応する肯定極性項目を持っているので、否定の焦点が既に確定しているからである。

更に、ある否定語が動詞に前置し、他の否定語が動詞に後置している時（(29a) ～ (35a)）、動詞の後に置かれた否定語は対応する肯定極性項目が否定の影響を受けて（否定の呼応の結果）否定極性項目として具現化されている（「否定極性を単独で与える否定語」ではない）。従って、no 以外の否定語は否定極性項目としての機能も同時に持つことが出来る[25]。

---

[25] 寺崎（1997：148-149）は以下の例を挙げて否定語が否定極性項目としての機能を持つと説明している。

（ｉ）a. ¡Nosotros nos divertimos aquí más que nadie en el mundo!

b. ¿Crees que nadie lo sabe?

寺崎（1997：148）

寺崎は（ｉ）に出現する nadie は否定極性項目とみなすべきであるとしている。しかし、正確に述べるならば（ｉa）の nadie は「否定極性項目として振舞う否定語」であり、他の否定極性項目、即ち un pepino、un comino、pegar ojo 等とは厳密に区別する必要がある。一方、（ｉb）の nadie は同一節内（従属節）で動詞 saber の前に置かれて従属節内を否定環境に変えているので、「否定極性項目として働いていない否定語」（即ち「命題に否定極性を与える否定語」）である。

(28c) の「動詞の前に置かれる否定語が一つだけ」という条件は、以下を参照のこと。

(36) a. Nunca lo hago.

b. *Nunca no lo hago.

出口 (1996 : 183)

c. No lo ofendí jamás en nada.

d. No pide nunca nada a nadie.

Bello (1980 : 331)

e. No he dado nunca nada a nadie en ninguna parte de ningún modo.

Hernández Paricio (1985 : 143)

(36a) は動詞の前に置かれている否定語が一つであるが、(36b) はそうでない ((28c) の要件に違反する) ため非文となる[26]。基本的に、スペイン語では同一節内に否定語が複数出現することを許さない (否定極性項目として働く否定語が複数出現することはある)。これは、英語と違い、スペイン語は日本語のように同一節内で二重否定を許さないことを意味する[27]。この時、(36c)、(36d) 及び (36e) が示すように、動詞の後

---

26 中世スペイン語では、この並びは必ずしも非文ではない。以下の文を参照。

(i) a. Nadie no me quiere.[Celestina]

Llorens (1929 : 120)

b. Ninguno non puede conoscer al Fijo sino por el Padre. [Siete Partidas]

Wagenaar (1930 : 26)

(i) はともに否定語が動詞の前に二つ置かれている文であるが、適格であった。また、口語的な会話においては、この並びは現代スペイン語でも散見される。他言語との比較研究については Micusan (1969) はポルトガル語やルーマニア語との対照、Jespersen (1917) はフランス語やドイツ語との対照から、スペイン語の動詞の前に置かれた否定語の単体性について議論を展開している。

27 英語が二重否定を許す証左として、以下の文を参照。

(i) a I haven't done nothing.

b. No one has nothing to offer to society.

中右 (1994) によると、(i a) の haven't 及び (i b) の No one はモダリティ否定、(i a) の nothing 及び (i b) の nothing は命題否定となる。また、(ii) のような表現や (iii) のような否定を強調する俗語用法では、否定語が複数存在しても同一節内では否定解釈がなされる。

(ii) He didn't give me no food.

(iii) No one never said nothing about it.

に置かれる否定語の数に制限はない。

しかし、動詞の前に no 以外の否定語が複数出現することもある。(37) は (28c) に違反するが、非文にはならない[28]。

(37) a. Nunca a nadie pide nada.
b. Nada a nadie pide nunca.

Bello (1980 : 331)

(37) が容認されるのは、出現している複数の否定語が概念構造内では一つの否定語とみなされているからと考えられる。これは動詞の前に置かれた複数の否定語が極めて語彙的であることからも確認できよう。

動詞の前に否定語があれば、それは動詞の後ろに置かれた要素を全て否定の作用域内に収める。従って、(36e) に出現する「否定極性項目として働く否定語」(nunca, nada, nadie, ninguna, ningún) は概念構造内ではそれぞれ対応する肯定極性項目 (それぞれ、SIEMPRE、ALGO、ALGUIEN、ALGUNA、ALGUN) として存在する。

さて、多くの先行研究では否定語に apenas を含めていることは前述したが、本稿では (前述した意味特徴に加えて) 以下の統語的な振舞いからも、否定語に含めない。この統語的な振舞いは、本稿で挙げている否定語には見られないものである。

(38) Apenas no me esperasteis.

Bosque (1980 : 105)

通常、否定語は動詞の前に置かれると、更にもう一つの否定語を動詞の前に置くことができない。

(39) *No / *Nada / *Nadie / *Ninguno / *Nunca / *Jamás / *Tampoco / *Ni no me esperasteis.

---

28 以下の文は動詞の前に置かれる no 以外の否定語が一つ (Nadie) で、後置される否定語が複数ある例である。

(i) Nadie me ayudó nunca en nada.

Gili Gaya (1961 : 52)

(i) は (36c) ～ (36e) と同様の分析が可能であり、ここでは繰り返さない。

従って、apenas は統語的振る舞いからも否定語とみなすことはできない。同様の例として、Gili Gaya（1961：52）や Sánchez López（1999：2567）、Hernández Alonso（1982：53）は en mi / la vida などの全称的な名詞が後続する EN 前置詞句も否定語に入ると主張するが、本稿では、apenas と同様に以下の統語的事実から否定語とはみなさない。

(40) a. Nunca en mi vida he oído algo tan absurdo.
b. En mi vida no he oído algo tan absurdo.

(40a)、(40b) とも否定語である no や nunca が en mi vida と共起して動詞の前に出現することが可能である。しかし、否定語とは (36b) のように、更なる他の否定語が動詞の前に出現することを許さない。更に、否定語の動詞への前置という観点からも、全称的な EN 前置詞句（en mi vida）は本稿で定義する否定語ではない。(41a) が否定解釈を持つためには、全称的な EN 前置詞句が動詞の前に置かれることを要求するのではなく、EN 前置詞句の主題化を要求するからである。

(41) a. En toda la tarde él agarró una criatura.
b. El en toda la tarde agarró una criatura.
(42) a. ¿Tampoco tú sabes nada?
b. ¿Tú tampoco sabes nada?

山田（1995：218 一部改）

(41a) は否定の解釈を受けるが、(41b) は EN 前置詞句が動詞の前に置かれているにもかかわらず、主題化されていないので肯定の解釈しか受けない。一方、否定語に同じ統語操作を加えた (42) は、両者とも否定の解釈を持つ。これは、全称的な EN 前置詞句の「主題化」が否定環境を引き起こす必要条件の一つなのに対し、否定語は「動詞への前置」が否定環境を作りうるトリガーとなっているからである。従って、全称的な EN 前置詞句は、(28) を満たしていないため、他の否定語とは異なる振る舞いを見せるということである。

4. 結語

以上、否定語の特徴（特に否定語 no）及び no とその他の否定語の相違を示した。

否定語 no（但し、応答の意味での否定語 no は除く）は否定の焦点が確定しづらく、また概念構造が複数存在しうるために解釈が曖昧になることがある。更に否定語 no は否定の呼応として働くことはなく、結果として否定極性項目としての機能を持たない。一方、no 以外の否定語は概念構造で対応する肯定極性項目が存在するために、表層に具現化した際にそれぞれの否定語に変化し、結果として焦点が確定されるので、解釈が曖昧になることは少ない。更に、対応する肯定極性項目を持つ否定語は、否定の呼応として否定極性項目として働くことが出来るので、動詞の後ろに置かれた場合には（否定語 no とは異なり）二重否定として働くことはない。

参考文献

Bello, A（1980）*Gramática de la lengua castellana.* EDAF.

Bosque, I（1980）*Sobre la negación.* Catedra.

Bosque, I & Violeta, D (dir.)（1999）*Gramática descriptiva de la lengua española.* 3 vol. ESPASA.

Chomsky, N（1981）*Lectures on Government and Binding.* Mouton de Gruyter.

Gili Gaya, S（1961）*Curso superior de sintáxis española.* Barcelona: Bibliograf.

Grice, H, P（1975）*Logic and Conversation.* Cole-Morgan.

Hernández Alonso, C（1982）*Sintáxis española.* 5a ed., Valladolid.

Hernández Paricio, F（1985）*Aspecto de la negación.* Universidad de Leon.

Jackendoff, R（1972）*Semantic Interpretation in Generative Grammar.* MIT Press.

Jespersen, O（1917）*Negation in English and Other Languages.* Andre. Fred. Høst & Søn, Kgl. Hof-Boghandel.

Llorens, E, L（1929）*La negación en el español antiguo con referencia a otros idiomas.* Anejo de la RFE.

Marcos Marín, F（1980）*Curso de gramática española.* Editorial Cincel.

Micusan, L（1969）"Estudio comparativo sobre la sintáxis de la negación en el español actual frente al portugués y rumano actuales." *Español actual,* 13. 5-13.

中右実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店.

沼田善子（2000）「塩も入れないと、美味しくならない」『月刊言語 11 月号』46-51. 大修館書店.

沼田善子・徐建敏（1995）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』105-225. 凡人社.

Real Academia Española (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Espasa Calpe.

Reinhart, T (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*. MIT Press.

Sánchez López, C (1999) "La negación." en Bosque, I y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*. Vol.2. 2561-2634. ESPASA.

田林洋一 (2008)『スペイン語の否定語における意味構造について』博士論文. 清泉女子大学.

寺崎英樹 (1997)『スペイン語文法の構造』大学書林.

Wagenaar, K (1930) *Etude sur la négation en ancien espagnol jusqu'au XVème siècle*. Groninga, La Haya.

山田善郎監修 (1995)『中級スペイン文法』白水社.

Sobre las condiciones sintácticas de palabras negativas en español y las diferencias entre ellas

Yoichi Tabayashi

El presente estudio trata de describir las condiciones sintácticas y las diferencias de palabras negativas en español.

Primero, investiga y describe la función de la palabra negativa *no*. La palabla negativa *no* tiene caracteres especiales como sigue. 1) *no* no funciona como Concordancia Negativa. 2) cuando *no* aparece en entornos negativos, se interpreta como negación doble. 3) *no* da la polaridad negativa a las proposiciones en cualquier lugar.

Segundo, analiza la función de las otras palabras negativas *nada, nadie, ninguno, nunca, jamás, tampoco* y *ni*. Esta parte tiene por objeto investigar sus diferentes tratamientos de los de *no*. Los caracteres de estas palabras negativas son; 1) requieren otro elemento negativo en posición preverbal si aparecen en posición posverbal. 2) dan la polaridad negativa a las preposiciones si y sólo si se postura en la posición preverbal. 3) sólo se pone una palabra negativa en la posición preverval, y otras palabras negativas tienen que aparecer en la posición posverbal como términos de polaridad negativa.

Se concluye que en las palabras negativas hay que distinguir *no* y otras palabras negativas según su función y carácter. Se espera que futuras investigaciones aclaren las condiciones semánticas y pragmáticas con más detalle.